

昭和五十四年七月二十三日  
 昭和五十四年十一月十五日  
 第三行（種郵便物認可）  
 每月一回・十五日発行

（通三二九号）

次

信	仰	と	苦	悶	………	近角常観	………	(1)
絶	对	他	力	と	体	験	(二)	………
池	山	栄	吉	………	(4)			
光	沢	………	抄	………	中島彰悟	………	(10)	
長	生	不	死	の	神	方	………	山本晋道
………	………	………	………	………	………	………	………	(16)
念	仏	詩	抄	………	木村無相	………	(20)	
愚	禿	の	こ	こ	ろ	………	花田正夫	………
………	………	………	………	………	………	………	………	(22)

目

63.8.22

Q

# 慈

# 光

第二十八卷

第十一号

宗教は人生の根帯を自覚せしむ  
 宗教といえは殆んど人生以外のことにように考える弊があるが大なる誤りである。若し果して人生以外のことならば人間の企ておよぶことの出来ないことで、どれほど高尚であつても、どれほど微妙であつても何の益もない。

宗教はむしろ人生に最も適切なものである。人生の真髓をつかむだものである。切言すれば人生の人生たる真意義を自覚せしむるものである。

しかし宗教をこのように人生的のことと解すると、又反対の極端に走つて宗教を全く社会的の意味に解釈し、人生界内の一種の現象で、全く内心の投影に外ならぬと考えるようになる。この点からみると宗教は詩歌音楽と同じように、人文史上の一要素にすぎない浅薄なものと考へる様になる。これはまた大きな誤りである。

たしかに宗教は人生的なものではあるが、人生の表面に現れる一現象くらいのことではない。人生の全体を徹観し

たものである、人生の始終を自覚することである。切言すれば人生の根帯を極めて、その人生なるものの価値、人生なるものの運命、進んで人生なるものが如何に靈界に接觸して如何なる位置をとりつつあるかを自覚することである

吾人がしきりに体験的宗教を主張するのは、この自覚を大切に勤めるのである。度々苦悶について云云するのも、決して苦悶そのものが必要であるというのではない。人生の極限を自覚する一つの場合として、古来宗教体験上、苦悶の結果安心を得た人が多いのである。苦し苦悶が信仰の要素のように考へるならば大きな誤りである。

全体人生の根帯を知るには人生の極限に達することが必要である。例えば死の問題とか、病氣するとか、非常な不幸に陥るとか、絶対絶命の厄難を被るとか、極端な事例をあげると、墮落してほとんど人生を滅ぼさんとするとか、絶望して自殺を企てる等の場合において非常な信仰を得た

人が多い。しかしこれらが宗教の要素であるというのではない。唯、このような場合に人生の極限を自覚したまでである。もし今列挙したものが宗教の信仰上の必要条件とすれば、宗教の信仰ほど危険なものはない。唯このような場合に人生として試み得られる限りの実験をして、人生はこれくらいなものである、人間の力はここで極まるものである。人情はこのあたりで尽きるものであると悟るのである。平時不真面目で暮しているときは、何気なく過ごしているが、いよいよとなれば人間はこれ程冷淡なものである、浅薄なものである、無趣味なものである、滑稽なものであると知るのである。如何ほど奮発しても人間は人間である、如何ほど心を清めても煩惱は無尽蔵である。親子といえどもこの辺涯を越えらたぬ、兄弟といえどもこの壘壁に行きつまるのである。死の問題や如何、所謂独生独死、独去独来である。未来の問題や如何、後生は独りしのぎ、所謂「親鸞は父母孝養のために念仏一辺も申したること候わず」である。この人生の辺畔に至つては人間の力はすでに絶えて、初めて絶対無限の力ははじまるのである。ここにいたつて人生の危殆なことが分かつて、靈界の地盤の上に立つべき必要が来るのである。人が溺れようとするとき必ず固くつかみ、人が斃れようとして必ず杖を握る。その間髪を容れず、決して苦悶そのものに何等の必要もない。唯苦

悶によつて人生の極限を知つて、絶対なる仏陀の偉大な力がはじめて光輝を發するのである。

人生は一種の囹圄(ろうや)である、狹隘な水溜りである。この囹圄におりながら、囹圄であることを自覚せず、悠々として醉生夢死しつつあるのがわれら凡俗の生活である。しかるに四方八方の鉄の檻に突きあたつて、はじめてこれを自覚するのである。狹隘な水溜りをもつて江湖のように考へて彷徨して得意がっているのが小魚の実況である然るにかしこ、ここの土砂や瓦礫にさまたげられて、如何にも浅い水溜りの中に生活して居つたかを悟るのである。

そこで囹圄の中で苦悶したり、水溜りの中で不満をうたえるのが決して安心する要件ではない。如何にも叩かなければ開かれず、求めなくては与えられぬ。しかし叩くのは開くためである、求めるのは得るためである。それなのに開くのを忘れて叩くことが信仰と考へ、与えられることを勉めずに、求めることが信仰と考へている一種のあやまりがある。はなはだしいのは、叩けぬとなげき、求められぬとかなしむものがある。所謂、急走急作して尽夜十二時に頭燃をはらうようにするけれど、すべて雑毒の善と名づけ、虚仮の行と名づくところがあるのがこの点である。禪の第二祖の恵可禪師が達磨大師をたずね、腕を斬つてなげうった

のも、腕を斬ったのが要点でなく、心を求めて不可得なのを悟った点が必要なのである。

釈尊が六年の苦行、遂にニレンゼン河に浴して一命を捨てようと思われた。しかし苦行は一分一厘も解脱に利益をもたらさなかった。菩提樹下での降魔成道の大悟の境に到達される道行きであった。他山の石として、オーガスチンの墮落、ルーテルの苦悶、いずれも、人間の力の極限を知る一つの場面にすぎないのである。

ひとたび苦悶の暗を破ってくるときは、たちまち世界は光明界である。人生の極限を悟了して、絶対の靈界に手がとどいたときは、人生の辺畔は没してしまふのである。

戸を排して蒼穹（おおおおとしたそら）を望む、すなわち室内は天空とつらなるのである。首をめぐらせば、今小人生は、あにはからんや、永久の靈活の生命と連続して悠久なる生活を吾人の日常の行動の上にもちきたすのである。ここにおいて、わが向うところ、仏これをたすけ、わがよって立つべきものは、ひとり仏陀の大威神力のほかは何物もないようになるのである。ここにいたって苦悶は宿夢のごときものと消えるのである。

『信仰問題』第七頂より。

## 「断想」 福島政雄

真の孤独は親を離れた孤独である、親を忘れた孤独である、親を知らぬ孤独である。それはたよりなきことの極みである。親を知らぬ者は人間に求めて得るところがない、空幻を掴かまんとするものである。

親を知るとは、親に生かされて居ることを知るのである。親の力をわがいのちに感ずるのである。わが身の全分が親のいのちの中にあることを感ずることである。この世に生れてはやく生みの親を失い、ひとの手に育てられて、全く親の味いを知らぬという人がある。それは孤独の人である。如何なるこの世の豊かさも、その人を真に落ちつかせることが出来ない。

慈愛ある生みの父母に生まれ、哺まれるのは順縁である。はやく生みの父母に死別し、或は悲しむべき事のために生みの父母に離れているのは逆縁である。順縁も、逆縁も、共に縁である。慈愛ある父母といえども、そのものに久遠の親たることは出来ない。怨めしくおもわれるような父母でも、これを離れて久遠の親の胸が開かれるものではない。怨めしい親であるからとて、離れて逢わぬようにすることは、久遠の親のいのちへの道をさえぎる所以となる。怨めしくとも親は親である「打たれても親の杖、なつかしければ去りやらず」という小袖曾我の文句がある。

## 絶対他力と体験(二)

救 濟 (如来)

池 山 栄 吉

### 王后韋提希の願求

世にめずらしい仁君、ピンバシヤラ王を夫に持ち、何一つ不足のない生を享樂し、世は楽しいものとはかり思っていた韋提希夫人が父王を幽閉し、自から王位につこうとした生みの子太子アジャセのために、自分までも王宮深く押しこめの身となり、歡樂の天辺から哀傷のどん底につき落され、つくづくと火宅無常のはかなさを思い知って、身も世もあられぬ悲しさに、雨とそそぐ涙ながらに、はるかに靈鷲山の方に向って、合掌稽首、釈尊を拝し奉って一心に救いを求めた夫人はやがて礼しおわって頭をあげると、思いきや、釈尊は早くもすでに現前していらせられるのに、かつ驚き、かつ喜んで、璽珞をかなぐりすて、からだを土の上に投出して、釈尊に向い

「一体私には、むかし何の罪があつてこんな子が生まれたのでございましょう。罪と穢れと醜くさにみち満ちてい

る世の中は、ほとほといやになりました。未来はどうぞこんなあさましきを見たり聞いたりしないところへまいりとうございします。つきましてはどうぞ憂悩のない清らかなところをしらせていただきたいものでございします」とお願いした。

### 釈尊出世の本懐

すると、釈尊が眉間から光明を放ちたまうと見ていると十方諸仏の国土がごとくその中に現われた。夫人はうつとりとして見とれていたが、やがて釈尊に向って

「どの御国にもきよらかな光がみなぎっていられますがあの阿弥陀仏の御国こそはまた格別でございします。どうぞかしこへ参りたいものでございしますが、どうしたらそうさせただけでございましょう」とおたすねにおよんだ。

積尊はこのたずねを待ちかまえていられたものごとくすなわちにっこりと微笑されたのも道理、今こそ出世の本懐をのべたまうべき機縁がここに熟したのであった。

そのとき積尊は夫人に告げたまうよう

「御身は知らずにいられようが、阿弥陀仏は遠いところに居らせられるのではない。今御身ならびに一切凡夫のために、極楽に生まれる法を説いてさかそう」

と、諄々として説き出されたのが観無量寿経一卷で、これは、表に方便として定善十三観、散善三福九品の観念、道徳の行業を説かれた裏に、真意として「念仏成仏これ真宗、万行諸善これ仮門」と知って、「自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり」との旨を示されたものだ。

### 獲三忍

夫人はこの話を聞くなり、長夜の夢からさめたような、からりとした気分になった。今の今まで胸一杯にとじていた苦悶は、烟と失せ霧と消えた。これまでついぞ覚えたことのないたのもしさ、よろこばしさが身にしみみて、他力攝生のおなさが心の奥底まで徹到するのを覚えた。

積尊出世の本懐は、こうして見事に達成された。

### 如来

「如来、一切のために常に慈父母となりたまえり、まさにしるべし、もろもろの衆生はみなこれ如来の子なり」とはアジャセ王が獲信のあかつき、まっさきに吐露した仏徳讃歎の叫びであった。

罪悪深重、煩惱熾盛の自性（もちまえ）から、生死（まよい）の境涯に沈みきって、浮ぶ瀬のない私達を、一人子のようにみそなわし、わが身を賭けても救ってやりたい、迷いを転じて悟りを開かせてやりたいとの、やるせない願望に駆り立てられて、わざわざ本覚（さとり）の境界から悲智円満の御姿をあらわして、信仰の対象となつて下さったのが阿弥陀仏で、無碍絶対の大慈悲がすなわちその本体である。

無明の深夜をあわれみて 法身の光輪きわもなく  
無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する。

### 因果

さて阿弥陀仏は、どういう方法で私達を救おうとせられたか。善い因（たね）はよい果（み）を結び、悪い因は悪

夫人は心想事成（るいれつ）の凡夫として、即得往生のさきがけとなった。こうして「本願を信じ念仏まうさば仏になる」と説いてある「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教」は端的に事実の上に顕示された。

念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ。

定散諸機各別の 自力の三心ひるがえし

如来利他の信心に 通入せんとねがうべし。

### 親心

水に溺れ、火に焼かれる者を見ては、それが日頃憎らし  
いと思ふなかであつても、死ねばいいと呪うほどでない限りは、助けずにはいられないのが人情だ。がんぜないみどり児が、ゴウゴウと汽車が近寄ってくるのも平気で、線路の内側で遊んでるのを見ては、どうしてそれを抱き出さずにいられよう。

まして、それがわが一人子であるとしたら、我身をすててもたすけずにはいられないのが親心だ。

い果を結ぶ。瓜の種には茄子はならぬ。それに何の例外があろう。

それなのに、極悪最下の凡夫の種から、極善最上の涅槃の実を結ばせようとは、悪臭紛々とした伊蘭の種子から、芳香馥郁たるせんだんの樹を生やそうというのだ。何たる背理（パラドックス）な思いつきだろう。

### 加威力

朽木は彫るべからず、糞土の牆（かき）はぬるべからず  
手のつけようもない悪いものが、そのままひとりでに転化して、絶対完全の域に進むというなら、それはいかにもつじつまのあわない話だろう。が、しかし、他から加わる威力によって、そのように転成するのだとすれば、それは必ずしもありえないことは言えまい。朱に交われれば赤くなる。壁（いざり）も乗物に乗せてもらえば、千里万里の遠きにも、やすやす達することが出来る。

さよう、阿弥陀仏はその乗物を工夫されたのであった。そしてその乗物というのは、つまり私達のひとり歩きの出来ない壁であることをあわれませたまう、如来大悲のはたらきに外ならないので、弘誓の船といい、大悲の願船といい、生死大海の船筏、本願円頓一乗などというのがすな

わちそれだ。

生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめる我等をば  
弥陀弘誓の船のみぞ のせてかならずわたしける

## 五 劫 思 惟

沈没した船を引上げるにも相当な工夫が要る。曠劫よりこのかた、常に沈み常に流転して、出離の縁のさらになく私達をたすける工夫をこらされた際は、定めて思案にあまらせられたことであろう。五劫思惟のご苦勞というのがすなわちそれだ。

鳥に鶴の真似をしろといったら溺れてしまふにきまつてる。牡牛のように大きくなると、しきりに腹をふくらます蛙は、はじめてしまふにきまつてる。

煩惱具足の凡夫と私達の本性を見抜かれた如来は、私達の方でつくる善根功徳を因(たね)として救いあげようとは仰言らない。出来ない相談を持ちかけられるのでは、五劫思惟の甲斐がない。

## 因 位 の 経 綸

煩惱具足の凡夫が、いやでもおうでもたすからずにはいられないように、思案に思案をかさね、工夫に工夫を積まれた法藏因位の経綸(けいりん)を、唯信鈔によってうかがって見ると、

「微妙嚴淨の国土をもうけん願じて、かさねて思惟したまわく。国土をもうくることは、衆生を導かんがためなり、国土たえなりというとも、衆生うまれがたくば、大願の意趣にたがいなんとす。これによりて往生極樂の別因をさだめんとするに、一切の行みなたやすからず。孝養父母をとらんとすれば、不孝の者はうまるべからず。誦誦大乘をもちいとすれば、文句を知らざる者はのぞみがたし。布施持戒を因とさだめんとすれば、慳貪(けんどん)破戒のともがらはもれなんとす。忍辱(にんにく)精進を行業とせんとすれば、瞋恚懈怠のたぐいはすてられるべし。余の一切の業みなまたかくの如し。これによりて、一切の善惡の凡夫、ひとしくうまれ、ともにねがわしめんがために、ただ阿弥陀の三字の名号をとえんを、往生極樂の別因とせん云々」

多聞淨戒えらばれず、破戒罪業きらわれず  
ただよく念ずるひとのみぞ 瓦礫も金と変じける。

## 選 擇 本 願

「難行の陸路をことに悲憐したまいて、易行の大道を広く開示したまう」ああでもないこうでもない、不向きなものを選び捨て、ふさわしいものをよりとって、凡夫の柄にはまるよう、繊細なしんしゃくを施したあげく、ようよう仕揚げられたのが、所謂選択の本願で、本為凡夫の仏心の結晶、大慈大悲の親心のかたまりがこれだ。

超世無上に摂取し 選択五劫思惟して  
光明寿命の誓願を 大悲の本としたまえり。

## 若 不 生 者 の 誓

「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがため」の選択の本願には、若不生者の誓と云って、もしこの願がかなわないで衆生が仏となれないならば、自分は仏とはなるまいと、自他の成仏を不可分の連帯とした条件がついていゝる。これまた実に一切の慈父母として、身をあげて活けるいけにえとしたまう如来の無蓋の大悲の頭彰といただくほかはない。

そもそも如来が私達衆生をあわれまれるのは、一体衆生というものは、それぞれに業(ごう)の袋を背負うていて、それがために苦しんでいる可哀想なものだと、大ざっぱに推量される位の、なまやさしいことではない。

「一切衆生異なる苦を受くるも、ことごとく如来一人の苦なり」で、何人子供があつても、その一人一人の病がひしひしと親の一身にひびくように、私達衆生の一人一人の苦しみは、一一端的に如来の御心にこたえて「一子のごとく憐念」されるのだ。弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と聖人が仰言つたは、けだしこの実相に深く感激していらせられてのこととかがわかる。

縦令一生造惡の 衆生引接のためにとて  
称我名字と願じつつ 若不生者と誓いたり

## 兆 載 永 劫 の 修 行

超世の願を建てられた如来が、それを成満させるために「たとえ身をもろの苦毒の中にとめおくと、我行は精進にして忍んで遂に悔いじ」と、天地もために感応した至純至誠の心をもって、限りしられぬ永い間、菩薩の行を

おさめたまうにあたり「一念一刹那も清浄ならざることなく、真実ならざることなく」「欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず」「勇猛精進にして志願倦むことなく」無量無辺の功を積み、徳をかさね、そのめぐみをことごとく衆生に廻向せられるのが、これぞいわゆる兆載水劫の修行で、その総べ高（しめだか）がすなわち阿弥陀の御名だ。

兆載水劫の修行は 阿弥陀の三字におさまれり  
五劫思惟の名号は 五浊のわれらに付属せり

### 絶対無碍

私達はあくまで自分の力で押し通そうとする、自分の壁（いざり）であることには気がつかない。従って如来の大願業力に乗托するなどは思いもよらない。それが私達の本性だ。

如来は、私達がそれで行きつまるのを見抜いておられる、そしてやるせない矜哀から、常住不斷に、清浄、真実、至誠の心をもって、私達にむかつて居て下さる。

私達が、それにすこしも氣つかずに居ようが、いくらか氣がついていながら頓着すまいが、疑おうが、むしろう

## 光澤抄

（住田智見師問書）

○ 真宗で云う仏様は、有神論か無神論かをお尋ねしたら、一言のもとに、それは有神無神を超越した不可思議光仏である。我が宗祖は他の祖師と大変相違している。不可思議とはわからんと云うことではない。御徳が广大で思慮の及ばんことである。

○ 祖師が六十二三の年にご帰洛になったのは、名利を捨てて一層本願の深遠なるを知らんとしてであろう。三十年間の京都時代に、尊い御聖教が沢山著わされて、末世のお互はそれがために導かれているのである。

○ 祖聖の三度の隠遁と云うこと、これは御年九才に出家、二十九才吉水入室、第三が六十余才のご帰洛である。隠遁とはかくれなざる意である。

○ 学者と自任している人は数々あるが、宗学者でありなが

が、おしのけようが、ふみにしろうが、その外どんなだいたそれた態度に出ようが、怒らず、呆れず、いよいよあわれみいつくしまれるばかりで、どこどこまでも見放そうとされない。

これが無碍絶対の大慈悲というもので、私達は早晚この大御心のまことにほだされて、我が力をなげうたずいられなくなる。

兆載水劫の修行とは、遠い遠い昔にあったこととばかり思っているのは勿体ない。現に思知らずの私達に対して、忍んで遂に悔いたまわぬ如来の態度がそれなのだ。

名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず  
衆悪の万川帰しぬれば、功徳のうしおに一味なり  
無碍光仏のひかりには 清浄歡喜智慧光  
その徳不可思議にして 十方諸有を利益せり

（未完）



## 中島彰悟

○ 仏様がどちらを向いておいでになるかを知らん者が多し。仏の向きたまう方角を知ることが大事な問題である。

○ こちらから仏を追うは自力の願生者、それでは何時までたっても安心出来るきずかいはない。

○ 逃げる私を仏が追いつめであることに驚かねばならん。御慈悲に氣がついたら、己れ忘れて仰せに随うだけである

○ 太陽が出たら、カンテラやランプの要はない。仏の真実にあえば、自力疑心が恥かしくなる。

○ 称我名字と願じつつ、と云う時は、我という字に氣をつけよ。どういふ仏であるかと、仏願に目をつけ、「汝の親であるぞ、母と呼べ」とあるお慈悲を頂くのである。

○ 念仏往生の願だけでは不い。誓願であるから、汝助ける

までは後へ引かんの誓がある。誓のある行は、念仏だけである。

○ 地獄と極楽を一処にして、無いと云うが、それは間違っている。

地獄は自分に造っている、自業自得である。極楽は願力成就の報土である。信心の智慧をうると地獄も極楽も自覚するようになる。

○ 如何にして信ずるか、自分から信心を起そうとしているが、それは駄目である。足べしふんで天に登ろうとあせると等しいことである。

○ いつまでたっても駄目であるから、仏がわが傍まで降りて来て下さって、われをたのめと久遠劫来呼びずめであるこのいわれに気付くのが名号のいわれを聞くことである。

○ 自力のはからいをしているということに気がついたら、この自力は間にあいそうなか否かを考えてみよ。五劫思惟は誰がためでありしか、なせかくまで永くかかったかをよくよく味合ってみよ。

○ 信心は如来の決定心から発起す。如来の御手まわしの丈

○ 心光に照されるとは、仏の心と凡夫の心とびったり合うことである。

○ 仏は智慧と慈悲とでたすけて下さる。煩惱具足の凡夫とは、智慧からの仰せ、汝たすけるまでは後へ引かぬとは、慈悲からの仰せである。

○ 老少不定と云うのは、死ぬ用意をせよと云うことではない。平常に安心して、びくびくせぬようになるためである。

○ わが身が悪いと思っただけなら機の深信ではない。その裏に善くしたいと云う心があるから。機の深信とはわが心は善くならぬ、役に立たぬとわが心を見限ること、法が知れねば機も知られない。両者ともに仏様に知らせてもらおうのである。

○ ひとりでお浄土へ行くつもりであると、いくら聞いても安心は出来ぬ。生きている時から仏様とふたりづれである。

○ 法然聖人門下で還相廻向をよろこびたまうたのは宗祖お一人。御晩年には特にこの感が深かった。一面また浄土の

夫さを聞け。

○ 浅い信とは、称えられぬ、よろこべぬ、まじめになれぬの心を直したいとする人である。

○ 深い信心とは、如来のおまことをよろこび、増々はまりこむ信、願力往生と決定して報謝の日暮しをする人である。

○ 歎異抄は戒律主義を破って強く信を勧め、御一代聞書は信より出る無戒の戒を御教化である。

○ 「それ三宝によらずんば何によりてか狂(まが)れるを直うせん」と聖徳太子の申されたのは、仏心をうけると光明に照されて足許が見えるようになり、穢悪の身を知らせて下さるからそう仰せられたのである。

○ 安芸の弥平同行は、麴(こうじ)を計り売りしながら、「見てござる、見てござる」と云って念仏していた。国家の復興もここからでなければならぬ。

○ 念仏のいわれが仏のまこと、そのまことを信ずるが無上涅槃の因。佛智不思議を疑う者が、念仏の数の多少を云うことになる。数を目的とする者は称える口に目をつける。しかし仏のまことに目をつけぬと落着けぬ。

○ 三尊仏がこの生死界に出て、救いの大活動をなしたまうことを深く感ぜられた。

○ 「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」を蓮如上人は現生の益とせられた。この気持は煩惱の中においても安心しておられること。維摩経には「火中に蓮華を生ず」とある。

○ 機の上の三信とは、

○ 至心……悪いことが悪いと知られる。

○ 信樂……御助けが疑いなく信ぜられる。

○ 欲生……決定成仏の思い。

○ 何のために法を聞かねばならぬかと問うものあり。これに答えて何のために薬を飲まねばならぬか、痛みて病を知らず、嘔々、哀なるかなと申された。この愚者は私であった。

○ 蟻が富士山に登ろうとすれば十万億土、飛行機で行けば頂上も直ぐ隣である。大願に乗託すれば仏様は枕辺に、見てござる、となる。

○ よく聞いたが、鼻にかかるようでは駄目。まこと御慈悲

がいただけたら、日々がこの世の果報者とよろこべるようになる。これがよく聞えたのである。

○ 説教とか布教とか云うが、これは仏教の広告とは云えるが、聞いても信心は恐らく得られんであろう。

蓮如上人は、法門讃歎とある。讃歎は信心からである。信じてようこそ、ようこそと喜ぶことが他を導くことになるのである。

○ 如実修行の本願力が、自我本位の凡心に融合して、凡夫の我他彼此の夢をさまさしめ給う。これが、喜、悟、信の信樂である。

○ 聖徳太子は、内外の苦しみを仏法で解決し、平和の本は三宝であると憲法に明示したまう。

宗祖聖人は、見仏、聞法、度生が一生涯のおたのしみであった。

蓮如上人は八十五年の辛苦を、ただ信心ひとつに慰められて、御満足の生活であった。

○ 「念々不捨者」、仏の念々不捨が衆生の憶念となる。当流は願力を信ずる一念に念仏行者となる。その故「不行に

○ 今の人は、生きるために忸くと云うが、なぜ生きねばならんかを考える人はない。

○ 先生は数々の雅号の中で、重に「古灰」と書かれた。これは先生の理想の人物、白雲亭巨海師の音をとられたのであろう。或日、古灰とある意味をお尋ねしたら、それは、古い灰は肥料にも何にもならん。つまり役に立たぬ者ということの意味であるとのことであった。

○ 歎異抄の終りに、死罪四人、流罪七人の名が記されているのは如何なるわけかとおたずね申したら、それはこの法門はかくあまたの人が身をすてて弘めなされたのであるから、聞く者また不惜身命で求法せねばならぬ道理をしらしまえんためであると。

○ 石塚、中村の両氏と私と偶然一所にいた時、今日は外の方がおらんから、幸い君等三人に依頼しておく。私も死期が近くなった。あとで墓碑は決して建てて下さるな。それはかえって後代が迷惑するから。山田文昭君の意中を知らず、あんな大きな碑を建てた。私も除幕式に行ったが、舎弟の文郁さんが困られるであろうと。今も先生の石碑はない。

して行ず」の義がある。

○ 十劫成仏の弥陀か、久遠の弥陀如来か。それは教行信証の上では明かでないが、御晩年はますます御内省が深まらせられ、曠劫流転の久しきを思い浮かべて、十劫以来の御憐みぐらいではない。これは久遠劫来の善巧の方便があれはこそと、御自省の深重なる御感じが、久遠の弥陀を渴仰されることとなったのである。

○ 現今は、念仏の法にはぐれ、そして仏を追いかけている従って不安とさみしきにおかされ、再び観念的となり、安心は宗祖以前に逆転している。

○ 観經の第八像觀の有難いことは、仏の真像を拝することである。その真像とは、自分の心から仏が生ずるのではなく、仏が衆生に向って見仏せしめようとしておられるに驚くのである。

○ わが身の罪悪を知るだけなら、自殺か、自棄となるだけ。光明のお照しをうけ、わが身のあさましさが知れ、自力のすたったのが機の深信である。

○ 私は先生の十三回忌のとき

乳離れて目につ瘦(やせ)や衣更  
とよんで、報恩の心のうすれ行くのを悔いた。今年はずや十七回忌、先生の御往生の齢まで生きのび追憶法要を催す。まことに感無量である。

おもかげは寂々として沙羅のごと  
昭和二十九年十一月、稿了。  
昭和二十九年 七月

法 如上 人 『御消息』

本流の世に流るる

○ 五逆十惡の凡夫、五障三從のいたずらものこそ本願のおめあてにて候えば、日本在々所々の御門徒に、「たのませてたのまれたまう弥陀の大悲、すなおに受けさせ申すべく候」

○ 何かのことむつかしく沙汰せぬが代々の相承の役目なり。ただたすけて下されよと申すにあらす、たすかってくれよとの仰せにしたがうばかりなり。



# 長生不死の神方

山本晋道

## 病床にて

これはある重い病人の枕頭で申し上げたお別れの言葉の一節であります。昭和十三年七月二十日、聞信会の午後の会を終るとすぐ、高原憲先生は、その自動車で私をこの方の枕頭にご案内下さいました。

「山本先生がお出で下さいましたよ」

そう云って高原先生は御紹介下さいました、お母様も来られ土用の入りも近い、よく晴れて大変暑い日でした。

御病人はお若い婦人で、数年前から私の発行している小冊子を読んで下さる人で、お名前は存じあげていたが直接お目にかかるのは今日が初めてである。聞信会例会には時時お出で下さった由であるがお言葉申したことはなかった。

数年前からの療養生活で、最近は腸をおかされて衰弱も加わり、足にも腫れが来て重態である。お別れの日も近いと思うと高原先生のお言葉である。御本人もすでにそのこ

れ出た。悲しさと嬉しさにお母さんの胸のふるえているのが私の胸にひたひたと伝って来る心地があるのであった。

それに応ずるかの如く、御病人もお念仏を始められた。私も共にお念仏申した。お姿を見ていて私は可哀さにたまらなくなった。そこでお尋ねを待ち切れずに、いま私の胸に溢れていることを申し上げ始めた。私の一言一言を、眼に一杯涙を浮かべて深くうなづきうなづき聞き入られた。

## 流れに浮かぶ泡の如し

「Hさん。お別れの時が来ましたね。……………」

短いお生涯でしたけれども、この世限りのいのちでなくお浄土まで続くお生涯であることが有難いですね。

長いと言っても短いと言っても、結局人生は夢の様なこととです。流れに浮かぶ泡の如く、かつ消えかつ結んではかない限りであると古人も申しておりますが実にその通りであります。あなたも終りが近づきました。こうしている私も、高原先生も、長いことはありません。流れに浮かぶ泡の如しです。二十年三十年しばし流れに浮かんで流れてゆき、ふっと消えてゆくのもあります。小さいもの大きいもの、濁った泡、澄んだ泡もあります。

時には泡と泡がひきあい、よりあい、或はかたまつて流れのよどみにむらがつてくるくる廻っていることもありま

とはお分りになっているので、一度私に直接会わせたいとの先生の御情けである。

## 最後の法縁

私はじつと御病人のご様子を見た。二十四、五才になれるであろうか。痩せ切って居られるけれど、落着いた、まことに麗わしいお姿である。先生と私とがお伺いしたことが如何にも有難いと思えて私共の方に向いておられるお眼には露がうかんでいる。

「今日は、山本先生に、何でもお尋ねなさい」

と先生が仰言った。私はお顔をみつめながらお尋ねを待った。生死巖頭に立って、この若い婦人は何を尋ねなさるだろうか、私は人生の最後にこの方に何をお答えすべきであろうか。

病室には一瞬儼かな沈黙があった。御病人も一言も発せられぬ。私も、先生も……。その時、室の一隅に、眼に一杯涙をたたえて坐しておられるお母さまの口からお念仏が溢

のいのちは生死の流れに浮かぶ泡の如きものです。

## 出離生死の一大事

Hさん、おいくつになられました。二十五、そうですか短い一生でした。けれども、はかなく消えて行く人生が永遠に生かして頂けるお浄土へつながるなら、決して短い人生ではありませぬ。これ一つとり落すなら、いくら長生きしたとて、何の甲斐もありません。

どこから来て、どこへ流れて行くのやら、お互いに随分遠い過去世から、生死の流れを流れて来たのでしよう。

因縁のままにかつ消えかつ結んで生死流転をくりかえしこの度も人生に流れて来ました。二十年、三十年、五十年この世の縁のつぎる時、また次の流転の旅に出て立つのでしよう。思えば夢の如く幻の如き人生です。

この世の人の運命には色々の差はあるけれども、結局生死の流れに浮き沈みして居ることは同じですね。笑う者も流されてお泣く者も流されている。富む者も、貧しい者も同じように。賢者も愚者も、善人も悪人も、老も若きも男も女も、一切がこの流れの中に流されて居ります。

この恐るべき事実を知っている者も、知らずにふざけている者も流されて居ます。五十年の人生をどう生きるかということも大切であるが、如何に生きてもこの生死無常の

流れの中からまぬがれられぬとすれば、先ず何より急ぐべきは、如何に生死を出すかの問題でありましょう。無常の流れを流れゆくこの身に永遠の生命を一つ頂いて、あとは因縁にまかせて人生の流れの中に生きて行く、これです、こうなつた時に、この世が初めて生き甲斐ある世となりましょう。ふざけて笑ってくらして、最後に泣いて死んで行くのはさみしいことです。泣いてくらしした人生でも、最後に深くほほえんで合掌してお浄土に生まれて往くなら、生き甲斐のあつた人生でしょう。

### 大和の了妙

蓮如上人が仰せられました。堺の日向屋の主人が死んだ。そう、あの男は三十万貫という巨財を持って何一つ不由の無い贅沢な生涯をすごしていたが、この度死んだが、何処へ行ったやら。三十万貫の財産も、生死の流れを出る力にはならなかつたろう。行く先のことを考えると哀れに淋しいことである。

大和の了妙は不幸な女で、生涯かたびら一枚もきかねるような貧しいくらしを続けていたが、貧しい中にもあの女は仕合わせであつた。了妙が貧しい中にもニコリとほほえんでお念仏申して暮す時、了妙の中には焼けども失せぬ宝が一つ光っていたぞ、了妙はきつと仏にならせて頂いたのである。

具足した本願御成就のみ名であります。この御名のひとりゆきで、久遠劫来迷ひ続けた生死の海を出させて頂くことが出来ます。

ためらいの心をふりすてて、やすらかに南無とこの願力に乗じましょう、阿弥陀仏は必ず救いたまうのです。

南無阿弥陀仏とは、南無と一念帰命するもの、ひとすじに阿弥陀仏をたのむものを、阿弥陀仏はよく知ろしめして、何のようもなくその願力にのせて連れて行って下さるおすがたです。私をたすけずば仏にならじとお誓ひ下さつた法蔵菩薩が、五劫の願行を成就して、はりきつた力の持ちぬしにおなり下されたおすがたが阿弥陀仏です。そのことわりを告げ知らせ、御自らの正覚を成就された不思議なお方に、早く私を乗せようとの南無阿弥陀仏のお名号とお聞きしてお祈りします。

名号とは名告です、御自らと、衆生と一体とならせられて、切つても切れぬことわりを御名において私に告げ知らせ、仏のお力に乗托させて救ひ遂げようとの思召しが六字の名号のおいわれであります。

阿弥陀仏とは、私を救いたまう仏ということであり、阿弥陀仏ましますとは、私の救われるお力があるということです。この仏のましますからには、私はその善巧方便のお力で必ずお浄土へ参らせて頂けるのであります。

### み名のいわれ

これです。人生の最初に先ず考えねばならぬことはこれでしょう。そして人生の最後に考えねばならぬ最も厳かな問題もこれでしょう。

あとのことは何もかも業縁です、業を果たしに來た人生です。泣くことも笑うことも因縁です。この世で果たすだけの業を果たさなくては人生はたてません。力一杯やってみて、結局人生はなるようにしかありません、あとはしずかにうけとつて業をはたして行くことです。

そしてこの複雑な因縁の流れの中に、尊い縁が一つ、生死を貫いてゆきかけて頂いていることを見落さぬことです、それは仏縁であり法縁であります。流れゆく私を追うて流れさせまじとゆきかけて下さるお力があります。それは阿弥陀仏の御本願のお力であります。このみ仏さまの御本願は、南無阿弥陀仏のお名号にあらわれて伺ひて下さいます。御名において、我をたのめ、必ず救うぞと呼びかけていて下さいます。助ける力の一切をすでに成就して、早く我が名を称えよ、必ず汝を救うぞと呼び下されてあります。このお誓ひを力として、ただお念仏することです。生死を出ずるしかけは、み名の中にあります、願も行も具足した南無阿弥陀仏と善導大師はあかして下さいました。こちらで何一つつけ加える必要のないほど一切の功德を

往生するには、このお方に、南無と乗托する一つです。

阿弥陀仏の願力に南無と乗ずるすがた―これが南無阿弥陀仏であります。

### ただ念仏して

Hさん、参らせて頂きましょうね。この世のこと、何もかも思えば夢の様なことです。夢の世に夢ならざるものただ一つ、御廻向のみ名、南無阿弥陀仏だけです。これを力として、南無阿弥陀仏とふみ出しましょう。

親鸞聖人は「ただ念仏して」と仰せられました。往生には私共のはからいはつゆちりほども要りませぬ。自然のひく所と大無量寿経にあります。おまかせする一つです。素直に本願力に乗じてこの身のまま参らせて頂くことです。

かの仏力によりかかつて往く者には、自分の胸中の明暗も定散も問題にはなりません。いよいよこうなつてみれば若いあなたの胸中には、さぞやいろいろの想いがわくことでありましょう。けれども、その乱れ心をすこしもお氣にかけなさいませぬ。乱れ心を始末しかねたそのまんま、仰いで仏智をたのむのです。仏様は何もかもよくお見通しです、言いわけも要りませぬ、ためらうてはなりません、遠慮するにも及びませぬ。お待ちかねの仏様は、悲しく乱れゆく凡夫の心をよく知ろしめして、かかる者を如何にして助けんとの願行とお聞きしています。私のことを何もか

も知り抜いて、早くわが胸にかえれとお待ち下さる親様と聞くからには、わが心をとりつくろうことをやめて、ただこのみ仏さまの御智慧とお慈悲をたのむ一つです。

そのお智慧とお慈悲の成就された、張り切っている六字のお力は、そのまま私を乗せて渡して下さるお力であります。本当にたのみとし力となつて下さるのは、このお力お六字さま一つであります。

且さん、生きなば念仏申すべし、死なば浄土に参るべしと法然上人は申されました。果たすだけの業はたさねばならぬこの世です、悲しさも苦しさもじつとうけとって、参らせて頂く日お待ちしましょう。長いことではありません、お浄土は眼の前です。そして、泣くときも、み親のお心聞いてみれば一人で泣くではありません、一緒に泣いて下さる親様があります。たよらない故、たよりになるぞとおよびかけです。そのお心がお六字にあらわれています。苦しい娑婆ももう長いことではありませぬ、かかる娑婆ゆえお浄土を成就して下さっているのです。

弥陀仏をたのんであなたが御相続なさるお念仏の一声一声は、これが久遠の迷いの迷いじまいの一足一足でありましょう。そのまま親様の待ちますお浄土へのうれしい一足一足となりましょう。

如来の作願

念 仏 詩 抄

仏さまから

ある婦人——  
// 仏さまから  
煩惱具足の凡夫と  
呼びかけて下され  
ましたゆえ  
何にも心配はいり  
ませぬ——

アトはカラ  
いつも仏法から  
はずれてる  
仏法の水のソトに  
いる——

何にも心配は  
りませぬ  
た、  
このまゝで  
このまゝで

貴女の短いお生涯もこの永遠の道に帰られることで、短くても永い尊い御一生でありました。こうなつて振り返ると、何もかも御恩づくめであったのです。

お念仏喜ばれるお母さんをもって、最後までこうして身も心もいたわつて頂ける貴女は幸せです。高原先生にかかられたのも有難い御縁でした。何もかもまかせられるお医者様に遇うことは難しいことです。先生は数年出来るだけのお手当をして下さいました。然し医療には限界があります、今や何ともならぬ日がやってきました、貴女は人間の力の限界に立たれました。生あるものは必ず滅す、この千古の鉄則の前には人間はつつましくうなだれるほかはありません。ここに如来の作願があります。

如来の作願たすぬれば 苦悩の有情を捨てずして  
廻向を首としたまいて 大悲心をば成就せり。

と聖人が讃歎していられます。諸々の衆生の生死勤苦の本抜かんと法蔵菩薩のやるせない発願は、この人生最後の謎に対する同悲同憂されての涙から生まれたのです。

今、お母さまも、高原先生も私もあなたに一番大切な問題をお知らせするためのお使いの役目を仰せつかったのです。「心配するな、私がいるぞ、必ず救うぞ」と仏様は、お母さんを通し、先生を通し、私を通してあなたをやるせなく呼んでおられるのです。

木 村 無 相

聞くときだけで  
アトはカラ——  
ナムアミダグツ  
ナムアミダブツ

マチガイ

あるひと曰く  
// ちよつとも  
仏法の水に  
つかつていると  
思ったら  
マチガイじゃ

聞くときだけで  
アトはカラ——

いつも仏法から  
はずれてる  
仏法の水のソトに  
いる——

聞くときだけで  
アトはカラ——  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

知れぬゆえ

江州大浜の  
吉右エ門婆ア曰く

//まるきり  
助けられねば  
参られぬ婆で  
あったと  
お助けにあわせて  
もらいました〃

まるきり

念 山 精 妙

## 愚 禿 の こ こ ろ

明治四十四年、親鸞聖人六百五十回忌の時出版せられた『宗祖観』に種々の人の説を編集してある。その中に、当時京大助教であった西田幾多郎先生が「愚禿親鸞」の題で寄稿していられるのでその一部を紹介しよう。

愚禿の二字は能く聖人の人となりを表わすと共に、真宗の教義を標榜し、かねて宗教そのものの本質を示すものではなからうか。人間には智者もあり愚者もあり、徳者あり不徳者もある。しかしいかに大きくとも人間の智は人間の智であり、人間の徳は人間の徳である。三角形の辺はいかに長くともすべての角の和が二直角に等しいというには何の変りもなからう。ただ翻身一回、この智、この徳を捨てたところに、新たな智を得、新たな徳をそなえ、新たな生命に入ることができるのである。これが宗教の真髓である。……ただ眼は眼を見ることはできず、山にある者は山の全体を知ることとはできぬ。自分の徳や智にとどま

助けられねばと  
知れぬゆえ  
信じて称えてと  
こっちから手を  
出すことばかり  
考える

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

弥陀仏の

弥陀仏の

すがたは見えぬ

弥陀仏の

声だけあれば

こころ安楽

## 花 田 正 夫

る限り、自分の正しい力を知ることとはできぬ。何人であっても赤裸々な自己の本体に立ち返り、一たび懸崖に手を撒して絶後に蘇った者でなければこれを知ることとはできぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味い得たもののみがこれを知ることができる。聖人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といわず、自力といわず、一切の宗教はみなこの愚禿の二字を味うに外ならぬのである。

然し右の様にいえば、愚禿の二字は独り真宗に限った訳でもないが、真宗は特にこの方面に着目した宗教である。愚人、悪人を正機とした宗教である。同じく愛を主とした他力宗であっても、ユダヤ教から出たキリスト教はなお正義の観念が強く、いくらか罪を責めるといふ趣があるが、真宗はこれと違い絶対の慈悲、絶対他力の宗教である。例の長者窮児の譬えにある、放蕩息子を迎えた父のように、いかなる愚人、いかなる罪人にも弥陀仏は、ただ汝のために我は粉骨碎身せりといつて、これを迎えられるのが真宗

の本旨である。歎異抄の中に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」と常にいわれたのがその極意を示したものである。

終りに宗祖その人の人格について見ても、かの日蓮聖人が意気冲天、他宗を罵倒し「北条氏を目して、小島の主等が云々」と壮語せしにくらべて、吉水一門の奇禍に連り北国に流されながら、「我もし配所に赴かずんば何によりてか辺鄙の群類を化せん」といって、法を見て人を見なかつた親鸞聖人の人格は頗る趣を異にしたものと云わねばならぬ。風号び雲走り、怒濤朝天の間に立ちて動かざること巖の如き日蓮聖人の意気は、壮なることは壮であるが、煙波渺茫、風静に波動かざる親鸞聖人の胸懷はまた何となく奥ゆかしいではないか。

以上のように讃仰してられるが、西田先生の晩年の頃に「凡夫とは如来が人への呼びかけである」と云われている。凡夫は凡夫の自覚は出来ないで、凡夫地を脱した不動地の菩薩がはじめて自覚すると十地経に説かれている。そこにこの菩薩以上のさとりを得られた如来において凡夫の相を了々に知り尽くされるのである。恰も山を出て山を知り、夢からさめて夢と知るに等しいことである。

さて私自身には、愚禿鈔に「賢者の信は内は賢にして外は賢者の仲間入りをしようとしていたので、裏がえせば終始頭を上げることにかかりはてていたと冷汗三斗、愧じ入るばかりであった。

憶えば、法然上人四十三歳、修学修行三十年、遂に、愚痴十悪の如何ともなし得ぬ身に直面せられて、南都、北嶺の学者、徳者をたずねて、教えを請われにけれど、答えて下さる人はなかつたのである。最後に源信僧都の往生要集に教えられて、善導大師の觀經四帖の疏をひもとかれた時、凡夫往生の道ありと聞かれて、身の毛もよだつ喜びにふれ、やがて弥陀仏は、この十悪愚痴の身をかねてしろしめされて、選択本願の念仏の救いの綱をさしのべて下さっていたと随喜の涙の中に念仏門に入られたのであった。その後、日本ではじめて浄土宗をひらかれたのも、十悪愚痴の凡夫の直ちに真実の浄土に生れ成仏出来る道が塞ぎされていたからであった。

幸に親鸞聖人二十九歳、叡山の二十年の修行も空しく、いずれの行も及び難き身に行き詰って山を下られ、六十九歳の円熟された法然上人をお尋ねになり、愚禿の身にかえられて、浄土真宗に帰入せられたのである。

さて、或人は自分の愚を歎いてさげすみ、或人はありもせぬ自分の智識を誇ってたかあがりをし、或人は愚者振ることによって偽善におちるといふ風に、いたるところに智愚

は愚なり、愚禿の心は内は愚にして外は賢なり」と聖人の御晩年に二度までも抄の上下の巻頭に掲げて下さっていることが大きな救いの光明となっている。

みのるほど頭のさがる稲穂かなで、真実の賢者は心から頭を下げているが、秋になっても白穂は頭をあげている様に底抜けの愚者の私共は、頭がさがらないのである。然しそのままではどうしようもない、どうかして頭のさがる身になりたいのである。ゲエテは「人はよくなりたいたいと願っているが無力である、無力ではあるが不滅な願いである」と云っている。私共も、頭のさがる身になりたいが出来ない、出来ないけれどその願いを捨てることも出来ない、そこに、翼を失った小鳥が大空を憧れて地上をのたうちまわるとに等しい行きつまりがある。こうして迷い苦しむ私に「愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」の聖人の仰せが聞こえた、これは全く驚きであった。

老子は「良賈は深く蔵して虚しきがごとし」と云い、ソクラテスは「我は何事も知らざることを知れり」と告げ、伝教大師も「余は愚中の極愚、底下の最澄」と述べて「内は賢にして外は愚なり」の聖賢の教を示されるが、私共にはついて行けない。底抜けの愚者はどの教えからもはみだされる身に、たったひとつ、親鸞聖人の言葉があった。そして、頭を下げようとしていたことが、すでにそれによ

の毒にはてしなく苦しんでいる。このどうしてみようもない身には、絶対の仏智をいただく、具体的に云えば、智慧の念仏を頂くことによつてはじめて光明の世界が開かれるのである。そこでは、恰も太陽が光を地上に投げかけると、空に輝く沢山の星がその光力を奪われてしまい、地上で光を競うた、電灯や洋灯やローソクの部屋も、皆一様の明るさになり、さげすんだり、いつわったり、いばったりしていたことを慚愧するばかりである。それは相対差別の智愚の域を超えた仏智不思議の働きであつて、仏力によつて求めず願わぬのに自然にめぐまれるよるこびである。

聖人は、この仏智不思議、徹底した絶対智をうけられて、愚の極限と申すべき、内は愚にして、外は賢なりと、御自身を表白されたのである。聖人八十八歳の最後のお筆に、

よしあしの文学をもしらぬひとはみな

まことのころなりけるを……(内賢外愚の人)

善悪の字しりがおほ

おおそらごとのかたちなり

是非しらず邪正もわかぬこのみなり

小慈小悲もなければ

名利に人師をこのむなり……(内愚外賢の身)  
とある。聖人の御一生を貫ぬいた慚愧であり、愚禿のころの至極の表白であり、唯一の私への救いの綱である。

あとがき

涼々として時はすぎて、師走近くなりました。水害、冷害と自然の障りも多く、外交、内政に人為の難問が重なつてもう、外けれど、仏法の上では順縁、逆縁ということがあります。順調な時は浮かれて、足許が危くなり勝て、逆縁は煩惱の上から苦しむのですが、かえつて法を味うには幸せすることが多いものです。昔から「艱難汝を玉にす」と申しますが、艱難だけでは、心が乾涸び、人をも白眼視しがちでありますけれど、そこに満ちわたる大慈大悲のお力で、転成されて、尊い教を頂いたと信の上からかえつて順境だつたと申せるのであります。

近角先生が人生の苦悶を指摘下さつて、そこに信仰の扉の開かれることを教えられました。池山先生は、果てしない苦海にさしのべられたる大悲の善巧を身をもつて教えて下さいました。本月は先生の御忌月として、心あたりしお読みいたしました。

住田智見講師を畢世の師とされた中島彰悟師の随聞記とでも申せる「光沢抄」を抄出させて頂きました。信の旅路によき道しるべとさせて頂きました。

山本晋道師の原稿は、臨終法話で、一言一言に力の限りを尽くされているのを覚えます。長崎で高原憲先生(医)と、聞信会

をおこされ、有縁の人々と念仏の道を迎られました。

木村無相さんは本秋は血圧も割合に順調で、一期一会の旅をせられました。蓬戸不出の生活の私は慚愧させられることであります。

「愚禿のころ」はお若い頃の西田幾多郎先生の書かれたものですが、世間には賢くなれ、立派になれの声ばかりのする中に、愚禿の尊さを告げられました。古い本の中から引用させて頂きました。念仏は、老人や愚者への教のように世の智識人や指導者を任ずる方々が申しますが、自分にほころべき智慧の無いことを知らされて始めて、真実を知らされはじめるものです。溜水にすむ小魚は、その外に出ることは出来ませんが、その愚を知らされて、広大無辺な世界からの光明がさしそめることはありがたいことでもあります。「心得たというは心得ぬなり、心得ぬというが心得たるなり」の蓮如上人の仰せが身にしむでびびります。

『念仏詩抄』重版のこと

木村師の詩抄が十一月初旬に第四版刊行

定価八〇〇円 送料一六〇円也

京都市下京区花屋町通西洞院西入

水田 文昌 堂  
振替 京都 九三六番

〔御案内〕

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。南区駈上町二の八八、一道会館。  
市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小桜町二丁目四番地。  
市バス、北山町、又は御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円(送共)  
一年 一四〇〇円(送共)

編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ八八 花田 正夫

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部 光雄

発行所 名古屋市南区駈上町二ノ八八 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七